

邪馬台国への道

～末蘆国から伊都国、そして奴国へ～



邪馬台国への玄関口/唐津湾

「濱山海居」/魏志倭人伝は、末盧国を「山海に濱（浜）して居す」と描写している/古来、ここが大陸や朝鮮半島との玄関口であった

 [video](#)



末蘆国（約4千戸）の菜畑・桜馬場～伊都国（約千戸）の三雲～奴国（2万戸）の板付などを見てみよう/まずは末蘆国の菜畑遺跡や桜馬場遺跡へ！



末蘆館のキャプションの一部を切り取り

ここは末蘆館/佐賀県唐津市菜畑に所在する日本最古の稲作発祥の地「菜畑遺跡」の出土品を展示している博物館で、邪馬台国時代の「末盧国」の代表遺物も展示されている/遺跡公園の広場には、日本最古の稲作ムラの竪穴式住居、日本最古の水田、縄文の森が復元されている



縄文時代晩期末（紀元前930年頃）の水田跡が発掘された

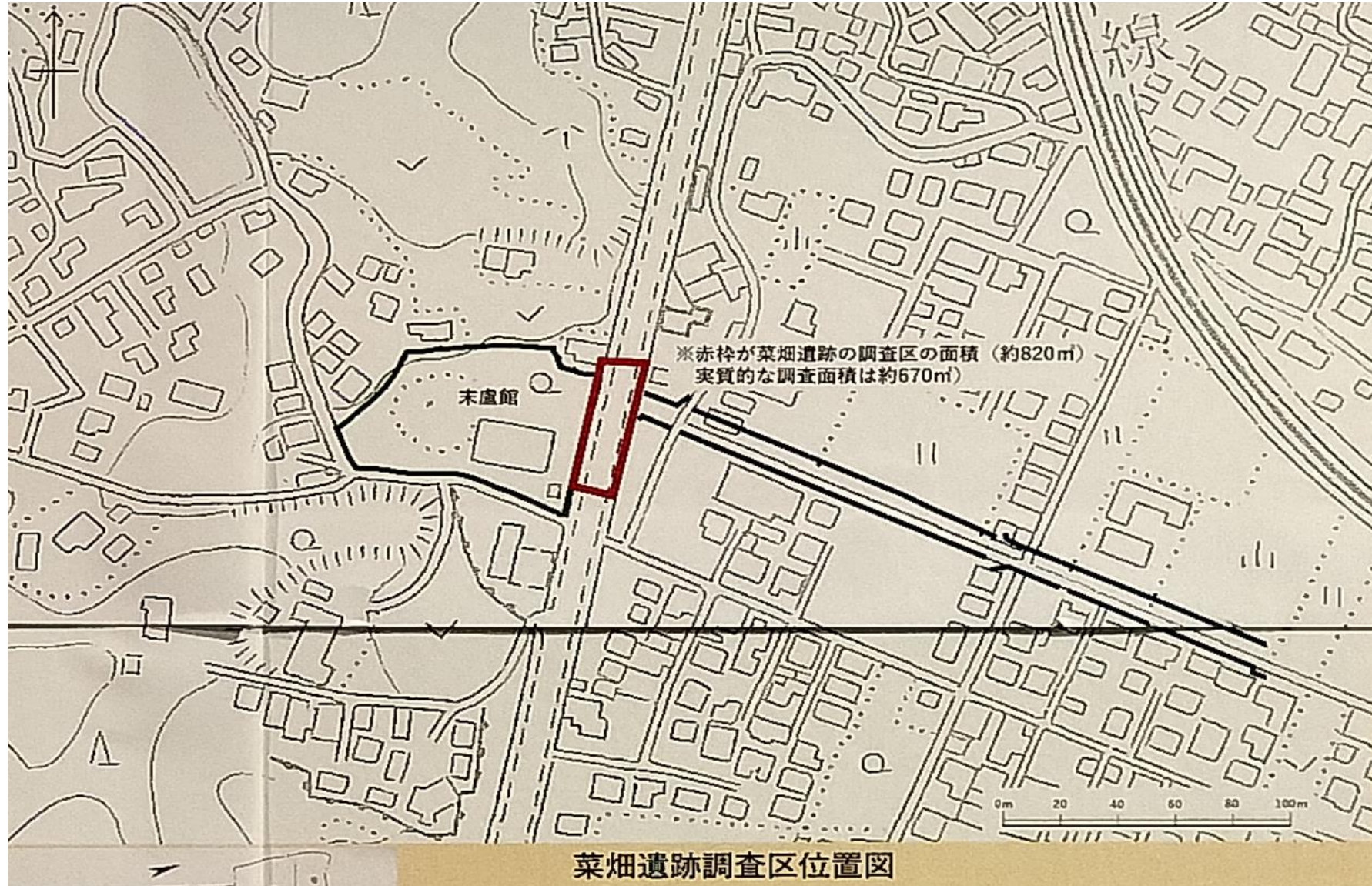


「史蹟 菜畑遺跡」と刻まれた標柱が立つ

[video](#)



末蘆館入口前の道路の辺りが1980年～1981年にかけて発掘調査されたようだ





じょうもん もり
縄文の森

なばたけ

菜畑のムラに生息して

います。当時はシイ・
しょうようじゅ
照葉樹が優勢で、マツ
でした。

ムラができるとエノキ
加わったところに多い

いた樹木のみを用いて

カシ・ヤマモモなどの
も多く海岸特有の植生

・ムクノキなど、人手の
樹木が増加します。

日本最古の稲作ムラの竪穴式住居



たて ^{あな} ^{じゅう} ^{まよ}
竪 穴 住 居

^{なばたけいせき}

菜畑遺跡で発掘調査さ

れた住居跡をもとに復

原したものです (縄文

^{じょうもん}

時代晩期)。

^{じだいばんき}

唐津周辺に特徴的な円

形面で、弥生中期のも

^{やよい}

のに比べるとやや小型

の住居です。

6本柱で中央に炉跡が

^{ろあと}

あり、特徴として屋根

を地にふせたようなカ

ヤ葺の建物です。

^{ぶき}

これは同じく唐津市の宇木汲田遺跡で発見された縄文時代晩期～弥生時代前期に造られた支石墓を移設したもの



支石墓

この支石墓は市内宇木の宇木汲田遺跡で昭和40年11月に発見されたものです。

支石墓は、今から約2,600年前の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてつくられたもので、掌石（上石）が長さ3.07m、幅1.04m、厚さ0.39m、重さ約3.0トンもある大きなものです。墓の内部は土壇墓（土葬）と考えられます。

これが蓋石で、墓の内部は土壇墓らしい



前方は水田/立札が立っている

[video](#)



水田

なばたけいせき
菜畑遺跡

で発見された日本最古の水田は小規

模(10m²~40m²平均で20~30m²程度)なもので谷にそって細長く広がった谷水田と考えられています。

深い湿田で土盛の畦と水路が掘られおそらく赤米がみのっていたことでしょう。



縄文時代
復元水田



古代赤米

これは末蘆館に展示されていた当時のムラのジオラマ

[video](#)

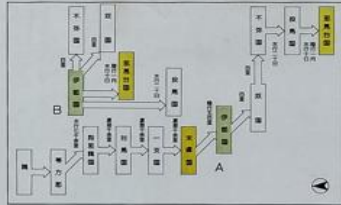


末蘆館に展示されていたキャプション

倭人伝の道

唐津平野は狗邪韓国を出て対馬、舌岐と島を渡る船旅の終着点、即ち交通上の大陸文化の門戸である。「末蘆」は松浦であり、山と海とそして平野の三部からなり唐津平野が中心である。平野には松浦川と半田川によって形成された沖積地が開け、そこには弥生時代の遺跡が多く、朝鮮、中国の青銅器の出土が顕著で、その濃厚さは奴国と比肩できる。なかでも宇木汲田、桜馬場はこの地方の中心的かつ象徴的な遺跡である。

邪馬台国への道



倭人伝
倭人在帶方東南大海之北依山島為國邑舊百餘國漢時有朝貢者今倭譯所通三十國從郡至後循海岸水行歷韓國不南不東到其津岸狗邪韓國七十餘里始度一海十餘里至對海國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絕島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有十餘戶無良田食海物自活乘船南北市雜又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市雜又渡一海千餘里至末蘆國有四十餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鱉水無深淺官流沒取一東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰淵謀爾支深淵有十餘戶母有王皆始屬女王國郡使往來

さて、正面の空き地は桜馬場遺跡/唐津湾を望む砂丘上に所在する弥生時代中期から後期の甕棺墓地で、末盧国の王墓の跡とされる



反対側から見たところ

[video](#)



劣化した説明板が立っていた/戦時中に防空壕の掘削中に甕棺が発見され銅鏡などが出土したが、戦時中でもあり、すぐに埋め戻された/その後、その場所が不明となっていたが、2007年に再発見され、副葬品の質の高さから、魏志倭人伝に記載される末盧国の王墓と推定されているようだ



こちらは同じく唐津市にある旧古代の森会館（現、鏡公民館）





現在は鏡公民館となっているのだが、「末蘆国研究室」という部屋があるようだ

代の森会館 ご案内



2階



大会議室	ヨガ・気功 10:00 体操三井島 19:00
小会議室	doramic START 18:00
研修室	カラオケ愛好会 13:00 doramic START 18:00
図書室	
郷土料理研究室	
末蘆国研究室	スポーツ協会 19:30
部の間	三味線 19:00 リレーヨガ 18:30

夜間利用者の方へ
最後に鍵をかける方は、二階の廊下、トイレ等の消灯確認までお願いします。
館長

ブックつうしん
図書館たより
貸出図書利用の方へ
本の貸出し時間は
17時までにお願ひします

却箱



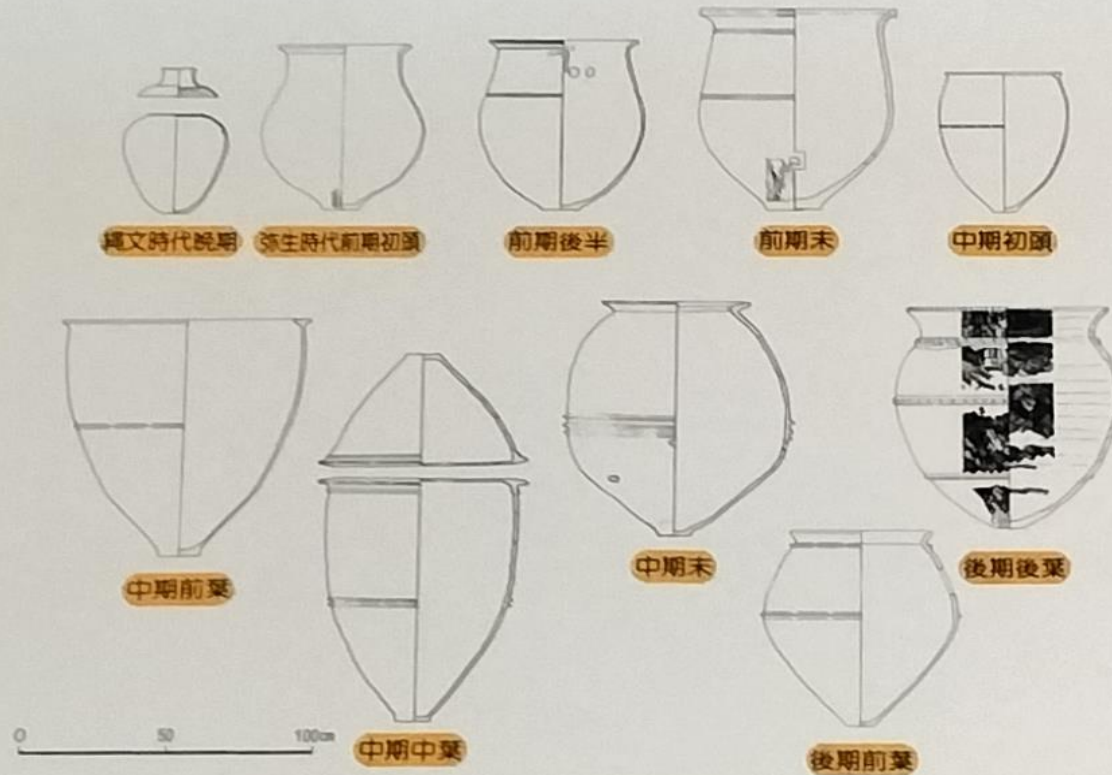
立派な資料館だった！

[video](#)



かめ かん 甕 棺 について

甕棺編年



北部九州の佐賀・福岡両県を中心にした地域では弥生時代前期末から後期には、それまで小型だった棺が高さ1 m程もある大型甕形土器を用いた墓が特徴的に形成される。この棺内には朝鮮及び中国製の青銅器・鉄器・玉類が多数副葬されている。特に唐津平野は青銅器の出土種類・比率が他地域より高い。剣・鉾・戈・釧では他地域にない独特なタイプのものがある。甕棺墓は中期までは盛行するが、後期になると土拵墓、木棺墓が主流を占める。甕棺墓は古墳時代前期までわずかに残る。

汲田式土器



宇木縄文時代晩期末～弥生時代前期の貝塚と、弥生時代前期後半～後期の甕棺墓を中心とする遺跡

宇木汲田遺跡

市内宇木汲田の夕日山北東麓の丘陵端にある、住居・墓地、貝塚よりなる遺跡。

昭和32年東亜考古学会、昭和40～41・59年九州大学、昭和58年唐津市教育委員会などの調査によって、甕棺墓、木棺墓、土拡墓、支石墓などの墓と貝塚及び土拡・溝・柱穴多数が発見される。墓地等より朝鮮製の多紐細文鏡、銅剣、銅鉾、銅戈、銅釧、勾玉、管玉、銅鐸の舌、石製把頭飾などが発見されている。宇木区所有の剣2・鉾2は昭和35年、国の重要文化財に指定されている。

土層断面図

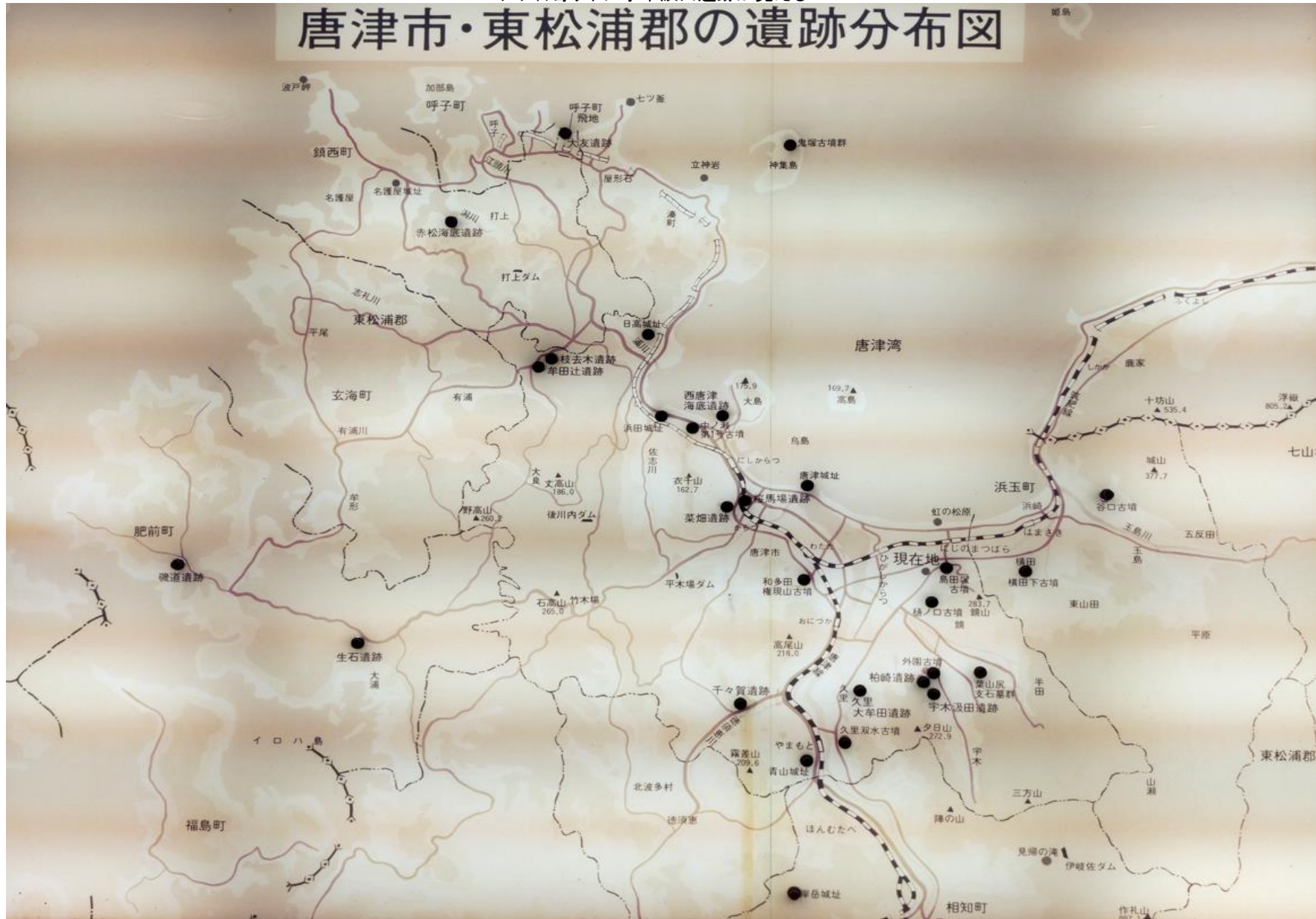


甕棺遺跡遺構配置図



やや右寄り下に宇木汲田遺跡が見える

唐津市・東松浦郡の遺跡分布図



説明板が立っている



魏志倭人伝は、伊都国について「代々の王が統治していた（世々王有り）」と記述している/その代々の王たちの眠る墓が糸島市の三雲・井原遺跡にある三雲南小路王墓と井原鑊溝王墓とされ、この地が伊都国の王都と呼ばれる所以である

三雲・井原遺跡 -伊都国の王都-

糸島市三雲・井原地内

三雲・井原遺跡は、中国の歴史書「魏志」倭人伝に記された弥生時代の国のひとつである「伊都国」の王都とされる遺跡です。遺跡の面積は、瑞梅寺川と川原川に挟まれた約60haの三角地(右図の緑色およびオレンジ色の部分)で、その規模は弥生時代において国内最大級を誇ります。

遺跡の発見は、江戸時代の三雲南小路遺跡、井原鑊溝遺跡の両王墓の発見にさかのぼります。本格的な発掘調査は1974年に開始され、今日までに100か所を超えるトレンチ調査が行われました。調査の結果、遺跡中央部に広がる大集落と、その南～北部には集落を囲むような形で、甕棺墓や石棺墓などの墓域が展開し、集落と墓域の間は数条の大溝によって区分されるなど、しだいに王都の姿が浮かび上がってきました。

王都としての特徴は、広大な面積のほかに集落域から豊富に出土した外来系遺物にみられます。仲田地区や番上地区から出土した中国産の辰砂や中近東原産のファイアンス玉(写真1)、朝鮮半島系の楽浪土器は中国、朝鮮半島との交流で繁栄した「伊都国」の証といえます。また、ヤリミゾ地区からは大量のガラス製装身具や銅鏡などが出土しており、王に次ぐ有力者の墓と考えられています(写真2)。

糸島地方を代表する貴重な文化遺産です。みんなで大切に保存しましょう。

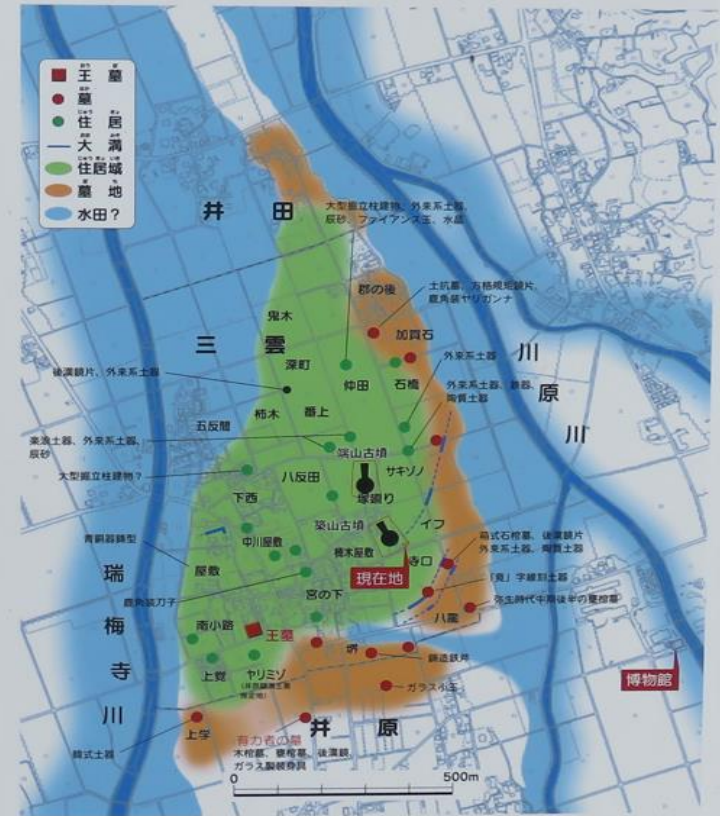
糸島市教育委員会

Mikumo-Iwara site -ITO Kingdom-

The Mikumo-Iwara site is south of Itoshima city, Fukuoka Prefecture. This Yayoi period site was named [ITO-Kingdom] as described in the Chinese Chronicle, Wei Zhi. It's located between two river, and the area is about 60 hectares, one of the largest scale in Yayoi period.

The result of the excavations, in the center there was the main settlement area, and in east to south there was the main burial area. Between the two area, several moat were invented to divide the settlement to burial area.

Many relics brought over from China and Korean peninsula have been excavated, and that the origins of some of these items extends past China to west Asia.



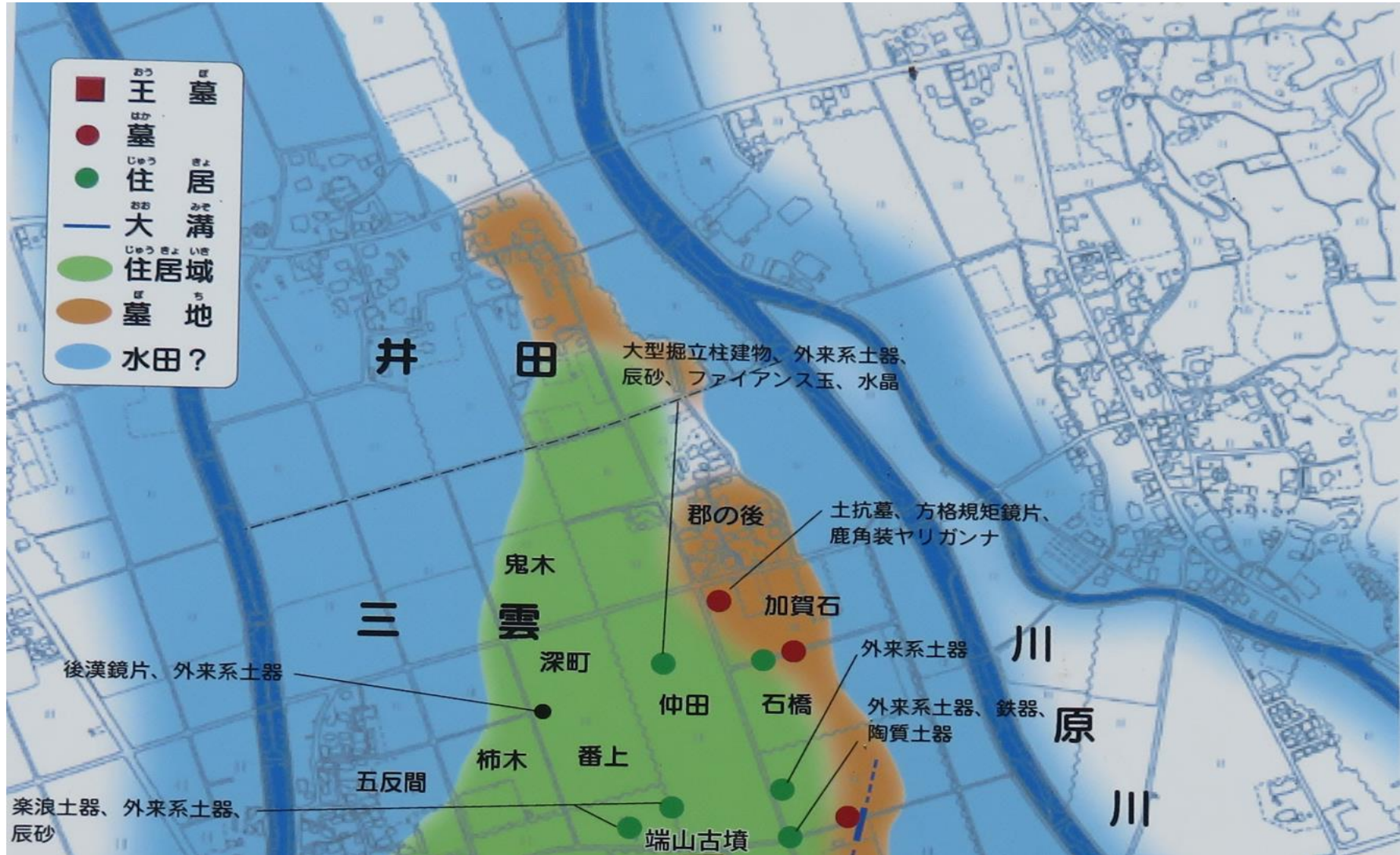
三雲・井原遺跡全体図



写真1 ファイアンス玉 (仲田地区)



写真2 銅鏡とガラス製装身具 (ヤリミゾ地区)





三雲・井原遺跡全体図

江戸時代に、ここで三雲南小路王墓（弥生時代中期後半/紀元前1世紀）が発見されたと云う



1つの墳丘の中に2つの甕棺がセットで埋葬されており、墳丘を囲う周溝も存在している/1号甕棺と2号甕棺は副葬品の様相から、1号には男性が、2号には女性が埋葬されていたと考えられ、この王墓に眠るペアは伊都国の王と王妃だったと推定されていると云う

国指定史跡 三雲・井原遺跡 南小路地区

三雲南小路遺跡

—国内最大級の弥生王墓—

三雲南小路遺跡は弥生時代中期末（約2000年前）の伊都国王の墓で、墓の周囲に幅3~4m・深さ0.5~0.7mの溝が巡り、東西32m、南北31mの方形区域を設けた国内最大級の弥生王墓です。江戸時代の文政5（1822）年に発見された時には、甕棺の上に1.5mほどの盛土があったとされ、墳丘の存在が想定されます。

墳丘の中央部には2基の大型甕棺があって、青銅製武器、金銅四葉座飾金具、ガラス壺、玉類などの装身具のほか、1号甕棺には35面以上、2号甕棺には22面以上の前漢鏡が納められていました。このように数十面の中国製の銅鏡を始めとする豪華な副葬品をもち、一定の墓域をもつものは王墓とされ、糸島市にはこのような墓が井原鐘満王墓・平原王墓へと続き、「魏志倭人伝」にある「伊都国に世々王有り」との記述を裏付けるものとなっています。

この三雲南小路遺跡を含む三雲・井原遺跡は平成29年10月13日に国史跡に指定されました。大切に保存しましょう。

平成30年3月31日

糸島市教育委員会

"Mikuno Minamisyouji" ruin - one of the largest tomb in the Yayoi period

"Mikuno Minamisyouji" ruin is the tomb for a king of "Itokoku" at the Mid-term end of the Yayoi period (about 2000 years ago). This is one of the largest tomb for king in the Yayoi period surrounded by a rectangular area (32 m east-west and 31 m north-south), separated by a groove of 3 to 4 m width and 0.5 to 0.7 m depth.

When it was discovered in Bunsei 5 (A.D.1822) in the Edo period, there was an embankment (about 1.5 m height) above the jar coffin. So the existence of mounds on the ruin is assumed.

There are two large jar coffins at the center of the tomb, in which there were many burials such as bronze weapons, gilt-bronzed clover-leaf-shaped fittings, glass ball, beads, and so on. Furthermore, bronze mirrors (imported from China) were put in there jar coffins (35 mirrors in the NO.1 jar coffin and 22 mirrors in the NO.2).

It is supposed that tombs with magnificent burials such as many imported bronze mirror sand with large tomb area, like "Mikuno Minamisyouji", were made for kings. In Itoshima city, there are other tombs for kings, "Iwara Yarimizo" ruin and "Hirabaru ruin". This is a strong support for the description 'There were kings for generations in the Itokoku' in "Gishi-Wajinden"

Ruins in Mikuno and Iwara area, including Mikuno Minamisyouji ruin, were designated as an ational historic site on October 13th, 2017.

Please take it carefully.



三雲南小路遺跡の墳丘と区画



埋葬施設の発掘状況



連弧文清白銘鏡



有柄中細銅剣

正面は1号甕棺の位置表示



左手から見たところ



芝生の濃い色の部分は周溝の位置を表している



こんな塩梅



さて、前方は平原王墓（弥生時代後期後半）/三雲南小路王墓（弥生時代中期後半）、井原鎌溝王墓（弥生時代後期前半）に続く3つ目の王墓



この平原王墓（1号墓）からは、古代の鏡の中では日本一の大きさを誇る内行花文鏡が出土している

国指定史跡 曾根遺跡群 平原遺跡

1982（昭和57）年 10月4日指定、
2000（平成12）年 9月6日追加指定

1965（昭和40）年と1988（昭和63）～1999（平成11）年に発掘調査され、弥生時代中期初頭の^{たてあな}竪穴住居跡7棟、^{つばかんぼ}壺棺墓1基・^{もつかんぼ}木棺墓4基、弥生時代後期の^{おぼしら}墳丘墓3基・^{どこうぼ}夫柱遺構3基・特殊建物跡1棟・古墳時代前期の^{まがたま}円墳2基・土壙墓12基・時期不詳の掘立柱建物3棟などが発見された。

このうち、弥生時代終末期の1号墓は14m×10.5mの長方形の平面形で、幅1.5m～3.0mの周溝で区画し、排水溝を持った墓である。主体部である広さ4.5m×3.5mの^{ほごう}墓壙中央には、長さ3.0m、幅0.7m～0.9mの^{わりたけがた}割竹形の木棺1基が納められていた。棺の内外から銅鏡40面、ガラス勾玉3点・^{くたたま}管玉30点以上・^{れんたま}連玉886点・丸玉約500点・小玉482点、メノウ管玉12点、ガラス耳環2点、水銀朱、鉄製素環頭大刀1本などが出土した。

特に直径46.5cmの古代で世界最大の超大型内行花文鏡5面を含む銅鏡などの豊富な副葬品から、1号墓は巫女的な性格をもった伊都国の女王墓と推定される。

なお、超大型内行花文鏡を八咫鏡として、「日本書紀」などにみられる^{おひるめのむち}大日靈貴の墓と考える原田大六先生の説がある。



平原遺跡の発掘調査風景
（昭和40年当時 西日本新聞社提供）

別の角度から見たところ



◆ ◆ ◆ ◆ ◆
くに し せき そ ね い せき ぐん ひらばる いせき
国史跡曾根遺跡群 平原遺跡
(昭和57年10月指定 平成12年10月追加指定) ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

～ 平原遺跡の発見から今日まで ～

平原遺跡は1965（昭和40）年1月に前原市有田の井手勇祐、セツ子、信英氏らにより農作業中に偶然発見されました。

その後、福岡県教育委員会を調査主体として平原遺跡調査団が結成され、厳しい寒さのなか、考古学者原田大六先生を中心に多くの市民の協力を得ながら約3ヶ月半に及ぶ調査が行われ遺跡の詳細が明らかとなりました。

昭和57年10月には曾根丘陵上に点在する狐塚古墳、銭瓶塚古墳、ワレ塚古墳とともに曾根遺跡群として国史跡に指定されています。

昭和63～平成11年度にかけて前原市教育委員会が調査範囲を広げて発掘調査を行い遺跡の全容が明らかになりました。

平成12年度には史跡範囲も拡大され現在にいたります。



平原遺跡の発掘調査風景 1998（平成10）年

ひらばる いせき がいよう
平原遺跡の概要

平原遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓遺跡です。
 史跡地内には1号墓（王墓）をはじめ5基の墳墓が保存されています。

1号墓

平原遺跡の中心となる墓で弥生後期末（2世紀後半）に築かれました。墓は東西14m、南北11mの長方形の墳丘を周溝が囲んでいます。墳丘中央部に東西方向に主軸を向けた4.6m×3.5mの墓壇を掘り、長さ3m、幅82cmほどの割竹形木棺が納められていました。木棺の内外から総数40面に達する破砕された銅鏡、鉄斧環頭大刀、豊富な装身具などが出土しています。



1号墓

2号墓

1号墓の南西に築かれた東西長7mほどの隅丸方形の墳墓で中央に舟形木棺の埋葬痕跡が残っていました。副葬遺物はないが周溝および周溝周辺で出土した土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に築かれたものと考えられます。



2号墓

3号墓

1号墓の東に築かれた径6.3～6.4mの円墳で、主体部は不明ですが中央付近から刀子1本が、周溝から滑石製白玉、ガラス小玉、鉄鏃、土師器が出土しました。出土した土師器から古墳時代前期前半の墓と考えられます。

4号墓

3号墓の南西部に築かれた径5mほどの円墳で、中央部から土壇墓を出土しましたが副葬品は発見されませんでした。

5号墓

隅丸方形プランの墳丘墓で、5.6m×5.2mの規模を有します。墳丘裾から弥生後期初頭の小児を埋葬した土器棺が出土しました。墓群中最古の墓です。付近では2面分の銅鏡(前漢鏡)片が採集されており、この墓に副葬されていた可能性が高いと考えられます。



5号墓



5号墓出土小児用墓棺



5号墓周辺から出土した前漢鏡片



大柱の痕跡



3,4号墓

副葬品の様相から、平原王墓の被葬者は女性だと考えられているらしい

◆◆◆◆◆ 平原1号墓の構造 ◆◆◆◆◆

1号墓の墳丘中央部に東西長4.6m、南北幅3.5mの墓壇が掘られ、王は内面に赤く朱を塗った割竹形木棺（大木を剥り貫いた木棺）の中に頭位を西に向けて安置されていました。胸には青いガラス製の勾玉を身につけ、傍らからはガラス小玉が出土しました。また、棺の内外から計40面の破砕された銅鏡、鉄素環頭大刀、耳環、瑪瑙管玉が出土しています。

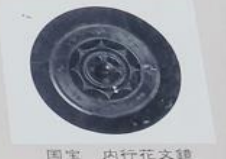
出土した副葬品などは一括して国宝に指定されています。



国宝 内行花文鏡



国宝 内行花文鏡



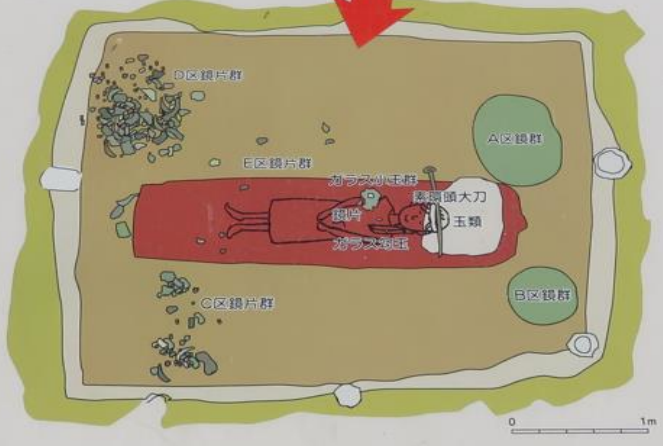
国宝 内行花文鏡



国宝 四鏡鏡



国宝 鉄素環頭大刀



国宝 方格規矩鏡



国宝 方格規矩鏡



国宝 方格規矩鏡



国宝 ガラス勾玉



国宝 ガラス小玉

平原1号墓

おうほあかし 王墓の証

国内最多の銅鏡副葬

平原王墓には総数40面の銅鏡が副葬されていました。中国では、女性の化粧道具の一つにすぎない銅鏡も弥生時代の倭人の王たちにとってはその威信を示す貴重な宝飾でした。

弥生時代の北部九州には、大陸や朝鮮半島から多くの銅鏡がもたらされましたが、その多くが伊都国、奴国に集中しています。銅鏡を多量に副葬した墓として知られる上位4増墓のうち、伊都国の王墓が3墓を占めます。弥生時代の伊都国には強大な権力をもった王が君臨していたことを知ることができます。なかでも平原王墓は、一つの主体部から出土した銅鏡の数としては国内最多を誇ります。



世界最大の銅鏡

平原王墓から出土した銅鏡のなかでも同じ型からつくられた5面の内行花文鏡は直径46.5cmに達します。わが国において最大であり、世界にも類を見ない超大型の銅鏡です。

弥生時代～古墳時代前期にかけて、銅鏡は王の威信を示す最も重要な宝飾であり、国内最盛。最大の銅鏡を副葬した平原王墓の王は、倭人社会において各地域の王をも凌駕する力を与えられた、まさに王の中の王であったと考えられるのです。

また、内行花文鏡はわが国で生産されたものと推定されています。銅質、鋳上がりも良好で青銅製品として完成度の高いものとされています。伊都国における青銅製の生産技術の高さ、先進性を象徴する宝飾品でもあったのです。



被葬者は女性

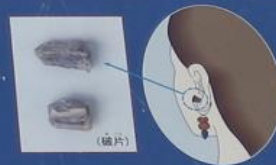
平原王墓から出土した副葬品のうち、銅鏡とともにガラス勾玉、ガラス小玉(約500個)、ガラス管玉、瑪瑙管玉など豊富な装身具が出土しました。

一方、武器としては細身の鉄素環頭大刀一本が出土したにとどまっています。

副葬されたガラス製品のなかから耳環と呼ばれる女性用のピアスが出土しました。このことから埋葬されたのは女性の王、つまり女王であったと考えられるのです。

ガラス耳環

現在のピアスと同じもの。漢の時代、貴族の女性が身につけていた。日本でただひとつの発見例。



並び柱群と大柱

平原王墓の西に二対、北裾に一对の鳥居状の並び柱跡が確認されました。また、王墓の東の地点では直径70cmほどの大柱を埋めた柱穴が確認されています。これらは、葬送の儀礼に際し樹立された柱群と考えられており、対の並び柱は鳥居のような役割をもっていたものと考えられています。

西の並び柱群からは王墓を介して大柱をのぞむことができ、その延長線上には日向峠が位置します。また、北の鳥居からは標高955mの雷山をみることができることから、これらの柱群は、この山並みを強く意識して建てられたものと推測されます。



それでは末蘆国・伊都国に比して、2万戸という大きなクニがあったとされる奴国の須玖岡本遺跡や金隈遺跡そして板付遺跡へ！



ここは奴国の丘歴史公園/この周辺が奴国の中心地とされ、弥生時代の遺跡が密集しており、ここはその筆頭の須玖岡本遺跡の一角に所在している/
前方のドームは甕棺墓群を発掘した状態で見学できる覆屋

[video](#)



春日丘陵上を中心に、弥生時代中期～後期の大集落「須玖遺跡群」が形成されており、丘陵北端部一帯の奴国王墓や王族墓、青銅器などの工房が集中している地区を須玖岡本遺跡と呼ぶようだ



説明板/岡本山地区からは「奴国王の墓」とされる甕棺墓が発見されていると云う

世界の中の奴国 史跡 須玖岡本遺跡

1000年

紀元前1000年
紀元前500年

紀元前100年

紀元前50年

紀元0年

紀元50年

紀元100年

紀元200年

紀元300年

紀元400年

紀元500年

紀元600年

紀元700年

紀元800年

紀元900年

紀元1000年

中国大陸

福岡県

大野城市

大牟田市

須玖岡本遺跡

春日市

熊野川市

永島市

福岡市

大野城市

大牟田市

須玖岡本遺跡

春日市

熊野川市

永島市

福岡市

大野城市

大牟田市

慶屋
甕棺墓群を発掘したままの状態で見学できる

王墓の上石
奴国王墓の甕棺墓の上の大石を展示

奴国王墓
大型の中国鏡が発見されるなど、奴国王墓とされる

熊野神社
銅矛の鋳型(重要文化財)が御神宝として伝わる

王族墓群
青銅器やガラス勾玉などが出土

青銅器工房跡
青銅器生産関連遺物が多種大量に出土

金印に刻まれた「奴国」の中心地

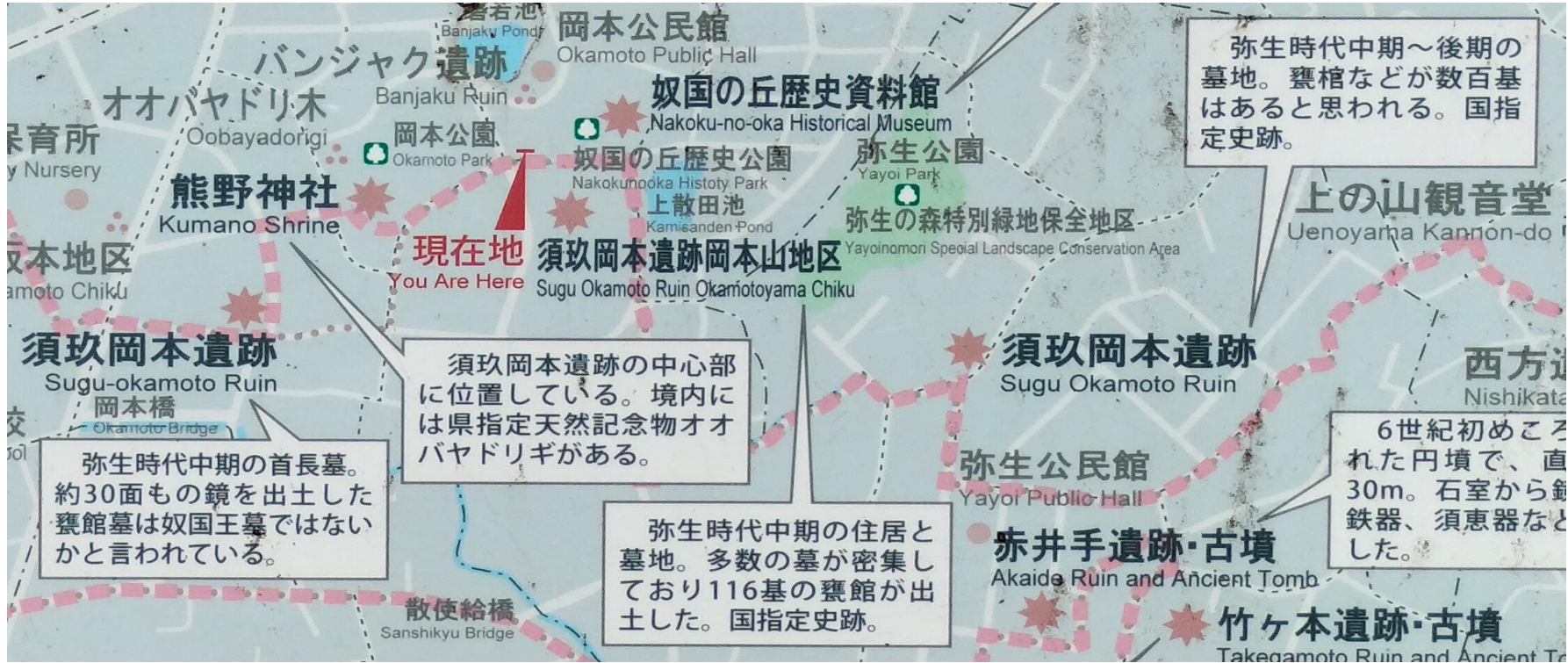
須玖岡本遺跡は弥生時代中期から後期を中心とする遺跡です。当時北部九州にあったクニである「奴国」の中心地と考えられています。中国の歴史書「後漢書」東夷伝(とういでん)に「建武中元二(57)年に倭(わ)の奴国王が後漢に使者を遣わし、光武帝から印綬(いんじゅ)を賜った」との記述があります。この印が、1784(天明4)年に志賀島から出土した「漢委奴国王」の金印だとされています。

王の墓が「奴国」の証拠に

ここが「奴国」の中心とされる最大の理由は、1899(明治32)年に岡本地区で発見された甕棺墓(かめかんぼ)です。この棺の内外から中国鏡30面前後、武器形青銅器が10本程度、ガラス璧(へぎ)、ガラス勾玉(まがたま)など多数の副葬品が出土しました。ほかにも甕棺の上の大石、墳丘内に墓が単独で築かれているなど、卓越した規模・内容であることが決め手となり、「奴国王の墓」とされました。

弥生時代の最先端技術都市

須玖岡本遺跡の北部には、青銅器工房跡が群をなしています。矛、戈(か)、剣、鏡、小銅鐸(どうたく)などの鋳型や埴埴(るつぼ)、銅滓(どうさい)、ガラス勾玉鋳型など多種の青銅器やガラス生産に関連する遺物が多量に出土しました。出土の状況から大規模かつ長期間に渡り生産されたと分かっており、その背景には大陸と直接交渉を行い、安定した原料の入手を可能にした奴国王の存在が大きかったと考えられています。



弥生時代中期～後期の墓地。甕棺などが数百基はありと思われる。国指定史跡。

上の山観音堂
Uenoyama Kannon-do

西方道
Nishikata

6世紀初めごろ築かれた円墳で、直径30m。石室から銅鉄器、須恵器など出土した。

竹ヶ本遺跡・古墳
Takegamoto Ruin and Ancient Tomb

赤井手遺跡・古墳
Akaide Ruin and Ancient Tomb

弥生公民館
Yayoi Public Hall

弥生公園
Yayoi Park

弥生の森特別緑地保全地区
Yayoinomori Special Landscape Conservation Area

奴国の丘歴史資料館
Nakoku-no-oka Historical Museum

岡本公民館
Okamoto Public Hall

奴国の丘歴史公園
Nakokunooka History Park

上散田池
Kamisanen Pond

現在地
You Are Here
須玖岡本遺跡岡本山地区
Sugu Okamoto Ruin Okamotoyama Chiku

須玖岡本遺跡の中心部に位置している。境内には県指定天然記念物オオバヤドリギがある。

弥生時代中期の住居と墓地。多数の墓が密集しており116基の甕棺が出土した。国指定史跡。

弥生時代中期の首長墓。約30面もの鏡を出土した甕棺墓は奴国王墓ではないかと言われている。

須玖岡本遺跡
Sugu-okamoto Ruin
岡本橋
Okamoto Bridge

熊野神社
Kumano Shrine

オオバヤドリ木
Oobayadorigi

バンジャク遺跡
Banjaku Ruin

岡本公園
Okamoto Park

散使給橋
Sanshikyu Bridge

保育所
Nursery

岡本地区
Okamoto Chiku

国指定史跡 須玖岡本遺跡 ～岡本山区～

1986(昭和61)年 6月 24日 指定

須玖岡本遺跡は弥生時代の代表的な遺跡で、中国の歴史書に記された奴国の中心地と推定されています。

奴国の丘歴史公園は須玖岡本遺跡の一角にあり、発掘調査によって弥生時代中期の墓地と住居跡が発見されました。歴史公園は丘陵の尾根部にありますが、尾根上の中央から東側にかけて甕棺墓などの墓地があり、この墓地を取り囲むように祭祀遺構が確認されています。

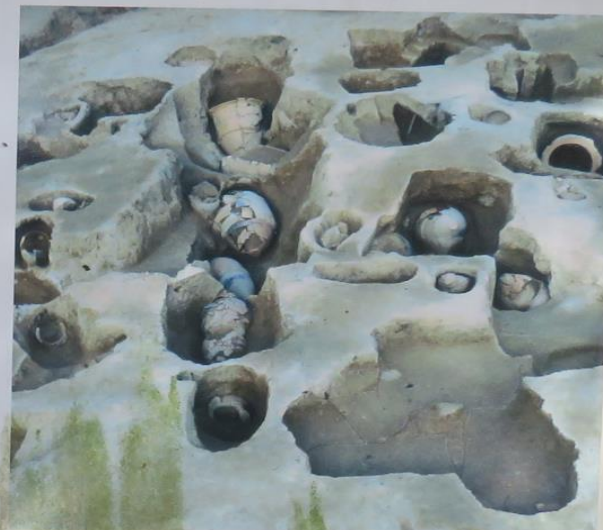
この墓地は奴国王墓や王族墓のように豊富な副葬品は発見されていませんが、奴国を支えた一団の墓地といえるでしょう。また、墓地の西側には南北に延びる小さな溝を挟んで、一段下がったところに竪穴住居跡が確認されました。

この遺跡は王墓や王族墓と同時期の墓地や集落があること、小銅鐸鑄型などの貴重な遺物が発見されたことにより国指定史跡となっています。左側にある覆屋では須玖岡本遺跡の一部が発掘調査時の状態で甕棺墓などを見学することができます。

2012年 3月 春日市教育委員会



須玖岡本遺跡航空写真(発掘調査当時)



甕棺墓などの墓地の出土状況



小銅鐸の鑄型



住居跡群の出土状況

お問合せ先: 春日市奴国の丘歴史資料館 TEL 092-501-1144

こちらには奴国王墓の上石が保存・展示されている

[video](#)



王墓の上石

1899(明治32)年、ここから約200m北西方にあった大きな石の下から、およそ2100年前に中国で作られた鏡30面前後をはじめ、銅剣・銅矛・ガラス璧・ガラス勾玉など多数の副葬品を伴った甕棺墓が発見されました。

「鏡・剣・玉」といった後世の「三種の神器」の原型ともいえる豪華な副葬品に加え、重さ4t以上の上石をのせるなど、ことのほか手厚く埋葬されたこの甕棺墓は、当時福岡平野一帯を治めていた奴国王の墓と考えられています。

また、発見時の記録と近年の発掘調査などによって王墓はほかの墓(王族墓)から離れてつくられた、単独の墳丘墓であったこともわかりました。

日本考古学の黎明期に発見されたこの王墓によって、須玖岡本遺跡の名は全国に知られるようになりました。1929(昭和4)年に京都帝国大学考古学教室調査団による、はじめての本格的な発掘調査が行われ、その後も須玖岡本遺跡を中心に重要な歴史的発見が相次ぎ、春日市一帯は「弥生銀座」と呼ばれるようになりました。

資料館には奴国王の埋葬の様子を再現した実大模型を展示していますので、ぜひご覧ください。

この大石は発見から幾度かの移転をへて、平成10年に現在地に移設しました。

平成25年3月
春日市奴国の丘歴史資料館 TEL092-501-1144



昭和4年当時の上石の状況

『筑前須玖史前遺跡の研究』から



王墓の原位置

現在の航空写真に昭和初期の地形図を重ねています



王墓の復元模型



王墓出土鏡の復元品

さて、A棟のドームの中に入れてみよう！





もう一つのB棟のドームの中にも入ってみよう/手前には竪穴住居跡が復元されている





こちらが復元された竪穴住居跡

[video](#)



たてあなじゅうぎょあと
復元した竪穴住居跡

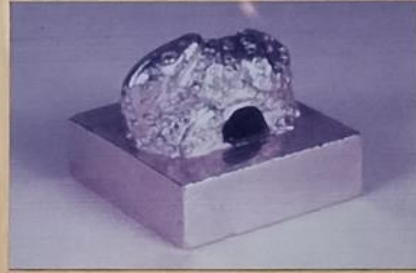
発掘調査した3軒の弥生時代の住居跡
の復元です。このような穴に柱を建て、
上に屋根を葺き住居としました。中央の
住居跡が最も古く、両
側の2軒は新しく建て
替えられたものです。



さて、ここは併設されている奴国の丘歴史資料館



なこく 奴国



中国の史書である『後漢書』に「けんぶちゅうげん建武中元二年
(57)、倭の奴国、こうぶ奉貢朝賀す。・ ・ いんじゅ光武賜うに印綬
を以てす。」という記述があり、この時、漢の光武帝から賜った印が、天明4年(1784)に志賀島で発見された「漢委奴国王」という印文の金印であると考えられている。これによって紀元1世紀に奴国という有力なクニが出現していたことがわかる。

奴国の位置については、那の津という地名などから、福岡平野一帯をあてるのが定説となっており、また、質量ともに傑出した出土遺物を誇る春日市の須玖岡本遺跡周辺が奴国の中心であったとみられている。

古来、大陸や朝鮮半島からの文物が流入する玄関口は末蘆国であったが、弥生時代中期後半頃以降には博多湾沿岸の諸地域にも交易の窓口が形成されるようになる/奴国内には対外交易の拠点としての西新町遺跡、内的な交流拠点としての比恵遺跡群・那珂遺跡群、最先端技術による手工業生産（鉄器生産）を行っていた博多遺跡群などがあり、その内陸に青銅器をはじめとする生産活動を行っていた須玖岡本遺跡群が所在するという位置づけで、奴国王墓のある須玖岡本遺跡こそが奴国の中心であったと云うことのようにだ





この地図の作成には国土地理院発行の標高タイル(基盤地図情報数値標高モデル)10mメッシュを使用した。

005 博多湾沿岸の遺跡群

近つ飛鳥博物館 平成29年度 秋期特別展 古墳出現期の筑紫・吉備・畿内～2・3世紀の社会と経済～ より



◆ 奴国の中心地

福岡平野の南部に位置する春日丘陵周辺は、以前から青銅器や^{いがた}鋳型など弥生時代の貴重な遺物の出土が多い地域として注目されていた。また、明治32年には須玖岡本遺跡から奴国の王墓とみられる多量の副葬品をもった^{かめかんぼ}甕棺墓が発見されており、この一帯が奴国の中心地と推定されている。

春日丘陵は青銅器丘陵

銅剣や銅矛などの青銅器は、弥生時代に大陸から朝鮮半島を経て伝来しましたが、日本では武器としてではなく、神々を祀る道具として独自の発展を遂げました。地域的な違いもあり、北部九州では銅矛や銅銭が、四国・瀬戸内海地方では平型銅剣が、近畿・東海地方では銅鐸が中心に使われました。

須玖岡本遺跡がある春日丘陵は、青銅器がとても多く出土する地域として、考古学者の間では”青銅器丘陵”と呼ばれるほど有名です。

先進技術



すくごたんだ
① 須玖五反田遺跡
(ガラス工房跡)

ガラス工房跡と推定される特殊な
竪穴建物跡の内外から、ガラス勾玉
鑄型や勾玉の未製品、玉砥石などガ
ラス製品の生産に関連した多数の遺
物が出土。



すくえいだ
⑤ 須玖永田 A 遺跡
(青銅器工房跡)

鏡鑄型、銅矛鑄型、銅矛中型、銅滓、
坩堝など青銅器生産に関連した多数
の遺物が出土。周囲に溝が巡る特殊
な掘立柱建物跡が青銅器工房跡であ
る。



すくさかもと
② 須玖坂本 B 遺跡
(青銅器工房跡)

銅矛鑄型、銅矛中型、銅滓、坩堝、
輸送風管など青銅器生産に関連した
多数の遺物が出土。



すくくろだ
⑥ 須玖黒田遺跡
(青銅器工房跡?)

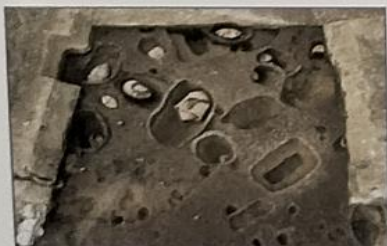
青銅器鑄型や銅矛中型などの青銅
器生産に関連した多数の遺物が出土。
須玖永田 A 遺跡と同時期で、遺物の
内容も類似しており、青銅器工房跡
が存在した可能性が高い。



すくおかちと

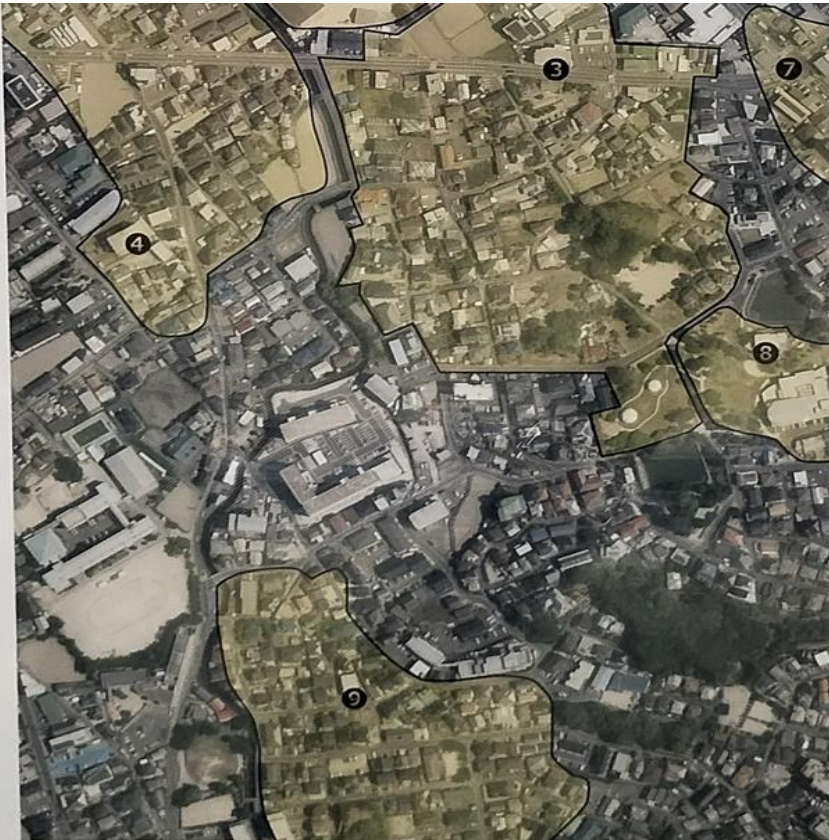
③ 須玖岡本遺跡坂本地区 (青銅器工房跡)

各種青銅器鋳型、銅矛中型、銅滓、坩堝など青銅器生産に関連した多数の遺物が出土。青銅器工房跡の特徴である周囲に溝を巡らせた掘立柱建物跡が群集し、奴国の官営工房といえる。また、ガラス勾玉鋳型も出土しており、青銅器とともにガラス製品も製作されていた。



④ 須玖タカウタ遺跡 (青銅器工房跡)

竪穴建物跡の内外から、多種の青銅器鋳型が出土。土製と石製の鋳型があり、これらの鋳型は奴国の青銅器生産遺跡の中でも時期が古いものである。



あかいで

⑨ 赤井手遺跡 (鉄器工房跡)

弥生時代中期の鍛冶遺構である33号竪穴建物跡では床面から著しく熱を受けた炉が発見され、鉄器の未製品や鉄素材などが多数出土している。また、青銅器鋳型やガラス勾玉鋳型も出土している。



が存在した可能性が高い。



すくおばなまち

⑦ 須玖尾花町遺跡 (青銅器工房跡?)

銅矛鋳型、銅戈鋳型、銅矛中型、坩堝などの青銅器生産に関連した多数の遺物が出土。青銅器工房跡が存在したと推定される。



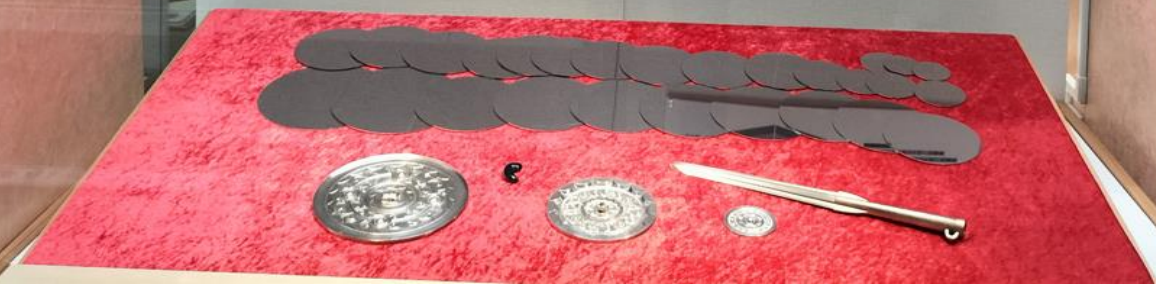
すくばんじやく

⑧ 須玖盤石遺跡 (青銅器工房跡?)

銅矛鋳型、銅矛中型が出土。周辺では以前から鋳型の出土が多く、青銅器工房跡が存在したと推定される。

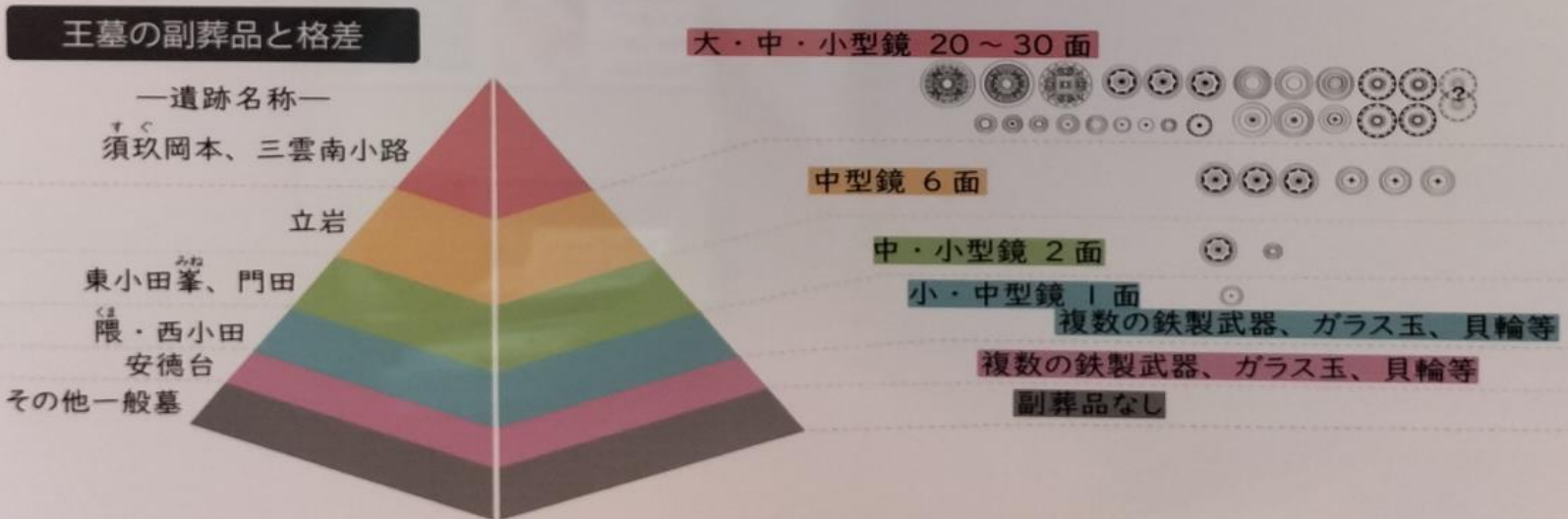
見えてきた奴国王墓と王族墓

◆ 奴国王墓
1899 (明治 32) 年、岡本で塚相墓が発見され、墓の内柩から中国製 30 箇前後、試料形肉御殿 10 本程度、ガラス鏡、ガラス短玉、ガラス珠玉など多数の副葬品が大量の家とともに出土した。この塚相墓は、墳丘を利用していた可能性が高く、墓 chamber から掘られて取り出されており、墳丘の上には長さ 3.3m、幅 1.8m、厚さ 30cm、重さ 4t の大石が設置されていた。掘出した特定個人であることが副葬品の質・量から他の墳墓より卓越していることから、この塚相墓は奴国の王墓といえる。



◆ 奴国王墓

1899（明治 32）年、岡本で甕棺墓が発見され、棺の内外から中国鏡 30 面前後、武器形青銅器 10 本程度、ガラス璧、ガラス勾玉、ガラス管玉など多数の副葬品が大量の朱とともに出土した。この甕棺墓は墳丘を有していた可能性が高く、集団墓から離れて独立しており、棺の上には長さ 3.3m、幅 1.8m、厚さ 30 cm、重さ 4 t の大石が設置されていた。独立した特定個人墓であることや副葬品の質・量が他の墳墓より卓越していることから、この甕棺墓は奴国の王墓といえる。





奴国王墓副葬品
再現模型

奴国の中心地だった理由①

～王墓や王族の墓～

奴国の範囲であったとされる福岡平野の中で、明治32年に須玖岡本遺跡で発見された甕棺墓”奴国王墓”以外に30面もの前漢鏡を伴うような”王墓”と言えるものはみつかりません。

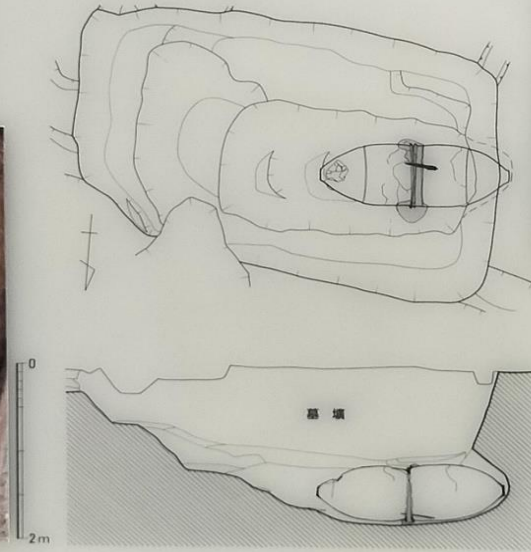
このほかにも、須玖岡本遺跡を含めた須玖遺跡群には、豪華な副葬品を持つ墓地がいくつも発見されており、奴国の中心地であったと考えられる。

◆ 須玖岡本遺跡の甕棺墓

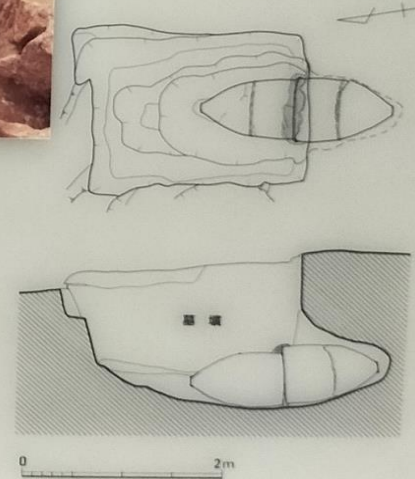
奴国首長層の墓地とされる須玖岡本遺跡の甕棺墓は、他の遺跡の甕棺墓に比べ、墓壇の規模がひとときわ大きい。



須玖岡本遺跡



岡本遺跡





こちらは金隈遺跡/金隈遺跡は、福岡平野の東を御笠川に沿って南北にのびる月隈丘陵のほぼ中央にある、奴国の一つのムラの共同墓地の遺跡で、弥生時代前期から後期までの約400年間に亘って営まれたと云う



史跡 金隈遺跡

国史跡指定 昭和47年5月17日



金隈遺跡は、弥生時代の前期末から後期の初頭（西暦紀元前二〇〇年から紀元二〇〇年頃まで）にかけて形成された甕棺を中心とした共同墓地です。

この遺跡は、規模が大きく、保存状態が良好なうえ、長い世代（四〇〇年間）にわたって営まれていたため、福岡平野における弥生時代の葬送文化の流れを知るうえで重要な意義を持っています。

この金隈遺跡を後世に託する市民の文化財として大切にしましょう。

福岡市教育委員会

注意事項

史跡指定地内を無断で発掘したり、き損したりしないこと。

この建物が甕棺展示館

[video](#)



弥生時代

甕棺かめかん展示館

甕棺かめかんなどを発掘状

態のままの姿で公開
する展示館です。

甕棺かめかんが最も集積し

ている場所に建てら
れているので、百基
余りを見学すること
ができます。

福岡市教育委員会

金隈遺跡の他、須玖岡本遺跡・博多遺跡群・比恵遺跡群・那珂遺跡群そして板付遺跡の場所が記載されている



この遺跡からは、348基の甕棺墓と119基の土壙墓、2基の石棺墓が発掘されている/最初に土壙墓が作られ、その後に甕棺墓、最後に石棺墓が作られたものと考えられると云う

[video](#)



館内に保存・展示されているものは、その内の「白い部分」のみということであった



甕棺墓からは、136体の人骨が出土した/平均身長は、男性が162.7cm、女性が151.3cmで、縄文人と比較すると、顔も面長になり、身長も急に高くなっている/このことから、朝鮮半島との交流による混血が行なわれていたのではないかと考えられると云う [video](#)



墓中の副葬品には、種子島からオーストラリアまでの海中にしか生息しないゴホウラ貝で作った腕輪や、石剣、石鏃、首飾り用の玉などが見つかリ、中国大陸や南方文化との交流を物語っていると云う



甕棺にも編年があるようだ

「このかめは、この頃より後の時代につくられた」ということがわかります。この作業を繰り返していけば、この形のかめが、おおよびいつごろつくられたのかもわかってきます。
このパネルには、金沢遺跡で発見されたかめ棺を古い順に左から右に向けて展示しています。時代ごとの形の変化をよみてみましょう。

◆飯付弥生のムラで行っている土器焼
きの様子

2,300 年前

最初のかめは、口が広く、中ほどにひびきがあり、丸っこい形状で、土器の中心が広く見えます。金沢遺跡では、このタイプのかめ棺から約100基ほど発見されています。



2,200 年前

また、土器の形が異なっていますが、口の上部に紐の痕跡があり、口が狭くなるのが特徴です。この形は、2層（層）で焼くことで、口が狭くなるため、徐々に焼くようになっていきます。



2,100 年前

土のなごりが見え、全体的にトングリのような形になりました。縁の部分が内側に大きく張り出しています。このころの陶器をつくる技術が向上したと考えられ、それまでののめり縁より縁に深く、容量の大きいものがつくられるようになります。

さらに技術が発達し、非常に大形ののめり縁がたくましくつくられるようになります。黄銅製の土器でもこのタイプがもっとも多く見られます。



2,100 年前

この時代の土器は、土質に大差のつかぬものが多く、土質の異なるものでもこのタイプがもっとも多く発見されています。



2,000 年前

これまでの土器は、くわての土質が、DからGの「C」の土質に
なります。これは、土質の異なるものが減少します。



こちらは板付遺跡/遺跡公園として、弥生時代最古の環濠集落や水田などが復元整備されている

[video](#)



菜畑遺跡に次ぐ水稲耕作遺跡/発見当時、日本最古の稲作集落と判明したことから、弥生時代の年代観を遡らせる先鞭をつけた遺跡

いた づけ い せき 板 付 遺 跡

The Itazuke Ruins

板付遺址 이타즈케 유적

板付遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代にかけて営まれた集落遺跡です。台地上に二重の環濠かんごうによって囲まれた集落と、その周囲に広がる土砂が堆積して出来た土壌ちゅうせきち（沖積地）に営まれた水田跡あぜで形成されます。水田は畦いせきで長方形に区画され、集落のある台地の外側には用水路と井堰を設置して水田に水を送り込みました。水田からは人の足跡も発見され、遺跡から出土した土器によって日本最古の稲作集落であったことがわかりました。昭和51年に国史跡に指定されています。

弦状溝は貯蔵穴を半月状に区画している/「田端墳丘墓」はムラ長たちの墓



いたづけいせき かんこうしゅうらく 板付遺跡 環濠集落

Itazuke Ruins The Moated Settlement

板付遺跡の弥生集落は、日本考古学協会による昭和26～29年(1951～54)の発掘調査により、初めて環濠の存在が確認されました。その後の発掘調査により、南北110m、東西81mの平面卵形をしていることが判明しています。板付遺跡では、かつて「縄文水田」や「最古の水田」と呼ばれた水田が発見され話題となりましたが、この環濠集落はこれより新しい弥生時代前期のものです。

発掘調査によれば、この集落の環濠はV字形に掘り込まれており、当時は幅約6m、深さは3～3.5mの規模であったようです。しかし、今の環濠は実物よりも浅く復元しています。環濠の両側には、掘削の時に掘り出した土を盛り上げた土塁をめぐらしています。また、環濠南西部に一か所、幅4mの掘り残し部分(陸橋)が確認できました。これが集落への出入口で、この場所のちょうど目の前にある出入口がそれにあたります。

環濠の北西部には直線的な溝(弦状溝)により、半月形に区画されている部分があります。ここでは多数の貯蔵穴が発見されており、食料などの貯蔵にかかわる区画だったことがわかります。

環濠内側には住居が存在したはずですが、発掘調査では確認することはできませんでした。そこで、板付集落と同時期の福岡県粕屋町江辻遺跡の発掘例をもとに、竪穴住居を復元しました。このような形の竪穴住居は、大韓民国忠清南道の松菊里遺跡で発見されていることから、日本では「松菊里型住居」と呼ばれています。平成25年度の修復工事では、新たに木組のみの住居を製作し、その構造が一目でわかるようにしました。

また、これら住居は、集落の中央を広場として、住居がそれを囲むように配置されています。これは、福岡県太宰府市前田遺跡・小郡市一の口遺跡などの発掘例を参考にしました。

The moated settlement of the Itazuke Ruins was discovered during an excavation from 1951 to 1954 by the Japanese Archaeological Association. At a later excavation, the ruins was found to be elliptical in shape running 110 meters north and south and 81 meters east and west.

No signs of houses were discovered at the excavation inside the moated settlement. Therefore, the pit dwellings displayed here are a reproduction based on the excavation records of the Etsuji Ruins in Kasuya Town, Fukuoka Prefecture, a ruins site of the same time period. A similar kind of houses was found in the Songguk-ri Site in Chungcheong Province, the Republic of Korea. Thus the pit dwelling here is named Songguk-ri style housing.

During the restoration of these pit dwellings in FY 2013, a wooden framework was newly constructed, clearly displaying the structure of a pit dwelling.



環濠集落の全図



竪穴住居の様子



環濠の断面

平成26年 3月 福岡市 Fukuoka City

みんなの文化財を大切に



「福岡市の文化財」ホームページ



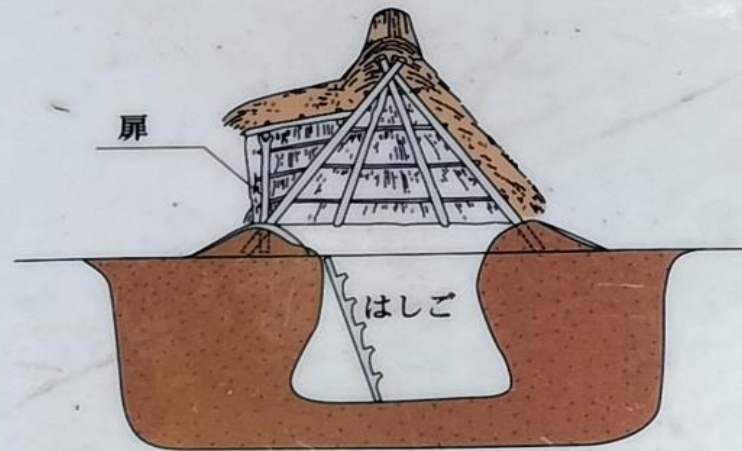
米やその他の食料を貯蔵するための竪穴

ちよ ぞう けつ 貯 蔵 穴

貯蔵穴は、米や豆類などの食料を保存した穴です。

たてあなじゅうきよ
竪穴住居の近くの貯蔵穴には、毎日食べる食料を入
れ、溝やさく柵で取り囲まれた貯蔵穴には、1年分の食料や
来年用の大事なたねもみ種粍を保存したのでしょうか。

他の遺跡では、湿気やネズミから食料を守るために、床
を地面から高くしたたかゆかしき高床式のそうこ倉庫も発掘されています。



ぼち ムラの墓地

ムラの墓地は、これまで数カ所で発掘されています。
ムラ人の多くは、板付北小学校付近の共同墓地まいそうに埋葬
されました。環濠かんごうのすぐそばには、子供たちの墓があり
ます。かわいい子供たちの死を
悲しんで、ムラの近くに埋葬し
たのでしょう。これらとは別に、
環濠の南東側には小高く土盛
りした墓地がありました。数基
の甕棺かめかんから、朝鮮製の銅剣どうけんや銅
矛ほこが副葬ふくそうされていたことから、
ムラのリーダーだったムラ長おさた
ちが葬ほうむられたと考えられます。



環濠（弥生時代前期）を見たところ

[video](#)



左手を見たところ



ここが集落への出入口

[video](#)





環濠集落の様子

[video](#)



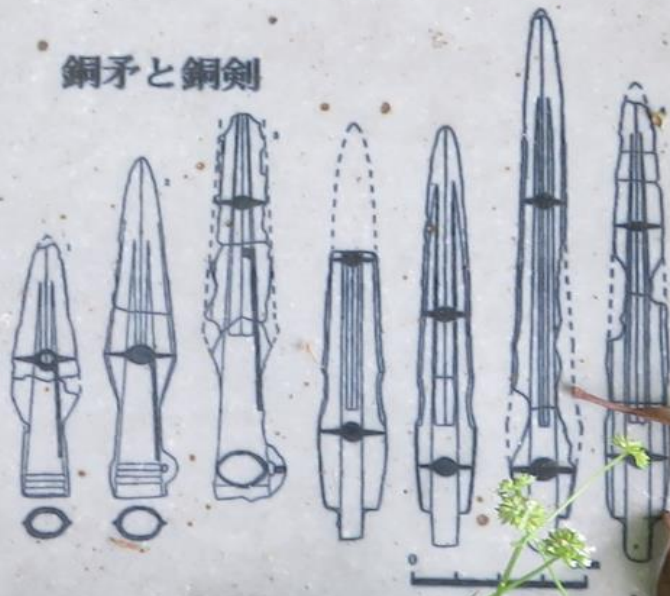
ムラ長たちの墓（田端墳丘墓）の大石



おさ はか ムラ長たちの墓

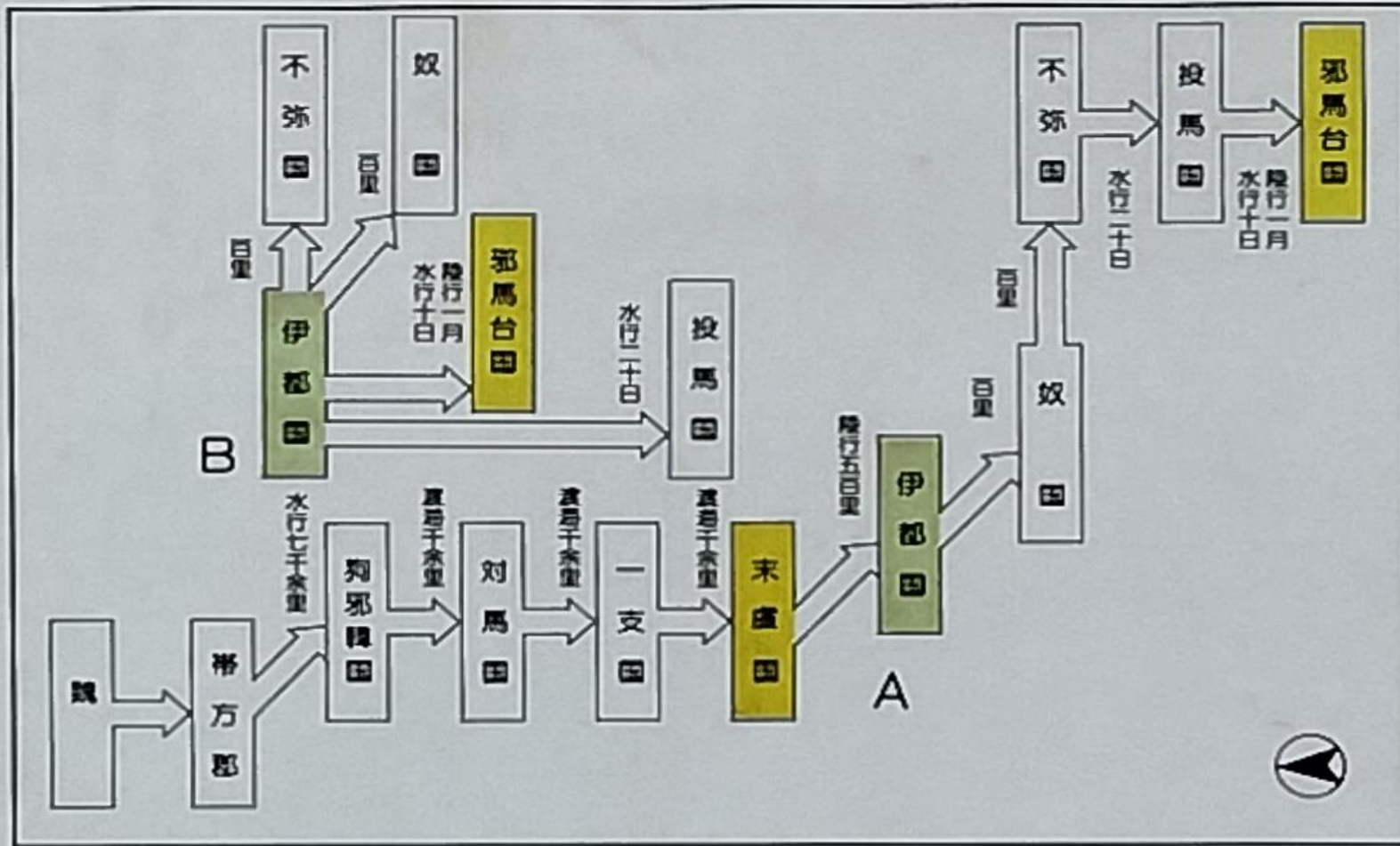
大正5年(1916)、村人たちが湿地の水田に土を運ぶために、板付田端^{たばた}という所にあった小高い盛り土を切りくずしていると、数基の甕棺^{かめかん}が出てきて、その中から朝鮮製の銅剣^{どうけん}や銅矛^{どうぼこ}が発見されました。これらは、葬^{ほうむ}られた人の身分や力をあらわす武器^{ぶき}でした。おそらくムラ人^{しどう}を指導していたリーダーたちが葬られたのでしょう。この大石は、盛り土の上にあったもので、墓の正確な位置はわかりません。

銅矛と銅剣



魏志倭人伝の著者である陳寿は、末蘆国～伊都国～奴国の先に、不弥国～投馬国そして邪馬台国があり、邪馬台国連合の女王卑弥呼が魏の皇帝から親魏倭王の仮の金印と銅鏡100枚を与えられたと記述している/さて、その邪馬台国は何処にあったのであろうか！？

邪馬台国への道



卑弥呼のいた邪馬台国は、やはりあそこか！？

弥生時代、北九州には末蘆国・伊都国・奴国というようなクニグニが成立しており、3世紀前半には邪馬台国の卑弥呼を共立して「邪馬台国連合」とでも呼ぶような広域の政治的まとまりが形成されていたことが魏志倭人伝から読み取れる。（奴国2万戸に比して、邪馬台国は7万戸のクニであったとされており、その数字はともかく、クニの規模は邪馬台国がはるかに大きかったものと思われる）

一方、上記で見てきたように弥生時代中期後半には博多湾沿岸の諸地域にも交易の窓口が形成され、半島からの最先端技術を受容するとともにその技術を東へともたらした。と同時に東からもたらされたものも受容し、地域社会が活性化していくこととなったとされている。（近つ飛鳥博物館 平成29年度 秋期特別展 古墳出現期の筑紫・吉備・畿内～2・3世紀の社会と経済～ より）

ここで「古墳時代」について考えてみよう！（下記のファイルを参照のこと）

http://www.ohoka-inst.com/goudo5_kofun.pdf

弥生時代から古墳時代へと移行する中で、古墳時代の墓制である古墳は凡そ3世紀前後から発生し初め、定形型前方後円墳の祖型と考えられる

「纏向型前方後円墳」が列島内で広域に広がり始める。（3世紀前半は実質的には古墳時代！）

すると、卑弥呼は古墳時代の人物ではなかろうか。

上記のファイルで見たように、卑弥呼の時代（3世紀前半頃）と台与の時代（3世紀後半頃）に、畿内の纏向の周辺に発生した纏向型前方後円墳が九州地方にも波及しているようだ。（纏向の周辺の纏向型前方後円墳と各地の纏向型前方後円墳の築造時期や墳丘の規模からすると、3世紀半ば以降の築造とされる箸墓古墳と各地の前方後円墳の在り方と同様に、3世紀初頭頃から纏向の周辺のクニを中心（核）に各地とのネットワーク

(連合) がゆるやかに成立し始めたと考えることが出来るのではないだろうか。

つまり、古墳の有様から見ていくと、3世紀には纏向の周辺のクニを中心(核)として列島各地に、本来は祭祀としての古墳がネットワーク

(連合)の証として、中心(核)となった纏向の周辺のクニへのゆるい従属関係の証として共有される時代になっていったということのようだ。

そして、この頃が列島に初期の国家(国)が誕生したということになるかもしれない。

魏志倭人伝に3世紀前半の列島には邪馬台国など30ヶ所程のクニグニがあり、邪馬台国の女王卑弥呼を共立して女王国(邪馬台国連合)を形成

していたとあるのは、この様子を伝えていると考えられるのではないだろうか。

邪馬台国は畿内にあった!?

それはやはり纏向の周辺なのかもしれない・・・